

あとがき

この研究は、『大分県地方史』三十八・三十九・四十号を合併して編輯した『豊後國大野荘特輯号』です。これが出来るまでには、次のようないきさつがあります。

昭和三十七年に、東京大学竹内理三博士を団長とする「九州莊園総合研究会」が、総合研究の第一歩として県下大野郡の大野荘の現地調査を実施しました。その研究成果については、郷土の歴史に関心を有するわれわれはもちろん、この調査に心からの協力を惜しまれなかつた地元の方々も、多大の関心をいだき、その公刊を待望する声が強かつたのであります。同研究会としては、大野荘を含めて九州莊園に関する論文集を出版することとし、すでに竹内博士のもとには会員の原稿もそろっていましたが、『九州莊園史料叢書』の出版のため、その公刊が停頓していました。しかし同会としては、本省や学界に対して報告する責任があり、現地調査の際の地元の協力に対しても、成果の出版物を贈って謝意に代える計画であり、その出版の遅延を何時までも放置するわけにはいかなぬ事情があつたのであります。

こうした事情から、次のことを条件として、この大野荘に関する部分のみを『大分県地方史』の特輯号として出版してはくれまいか、とのお話しが竹内博士からありました。その条件といふのはそれ相当の援助をするので、大野・朝地両町および莊園研究会に要する一定部数の本(本製本)を提供してほしいということであり、前記の現地調査の下準備や予備調査を行なひ、本調査のお膳立てをしたのは、外ならぬわが地方史研究会の会員である中野・飯田両氏と筆者であり、大野荘の原稿もこの三人が分担執筆していたものでもあり、右の条件を考慮の上、委員会の議をへて本誌特輯号として出版することに決定した次第です。以上により竹内博士からは多額の出版費の補助を与えられた上に、原稿を編集され、かつ多忙の際にもかかわらず序文をお寄せ頂いたのであります。

さていよいよ出版になってみると、原稿枚数の意外に少ないことがわかり、現地調査の際に筆者の編集した『豊後國大野荘史料』(『九州莊園史料叢書』一)(孔版)を加えたいとの意見が出され、三恵印刷社長高井久雄氏からも、本文並みの単価で奉仕するとの厚志を示されたので、委員会にはかつてこれを採用するのことにしました。そこで筆者は先の史料に増補訂正を加え、史料篇として付加したのであります。ところが、このため四十五回の校正を要し、思わざる手間と日時とを費し、印刷社に対してはもろろんながら、竹内博士や会員諸氏に対して多大の迷惑をかける結果となつた次第であります。

前記のような竹内博士との約束によつて、本誌は雑誌仕立の外に、九州莊園総合研究会編『豊後國大野荘の研究』(本装復、仮装復)と題する単行本を別仕立てとして製本しました。両者は表紙は異なりますが、上記の事情によつて別仕立てとしたものであることを、本書を利用される方に御承知頂きたく、なお「史料篇」は旧孔版『豊後國大野荘史料』と文書番号が若干くい違つてきていることも、お断りして置きます。

以上の通り、本号は竹内博士を代表者とする「九州莊園総合研究会」の厚志と、三恵印刷の協力によつて完成されたものであることを特記し、心から謝意を表します。なお特記に忘れられぬのは、現地調査に當つて示された立川輝信氏や、地元の大野町および朝地町当局・教育委員会・公民館・郷土史研究家等の積極的な御協力と御援助の数々であります。大友能直夫妻と関係のある大野町の勝光寺址や「とまりごう」・上津八幡宮、朝地町の筑紫尾寺(現普光寺)の巨大な石仏、大野泰基の自刃したと伝える神角寺城のすばらしい眺め等々が、現地の方々で温い心とけあつて、昨日の出来事のように思い出されます。一々御芳名は記し得ませんが、この紙上をかりて心から御礼を申し上げ、両町の今後の発展と皆様の御多祥を祈つてやみません。

以上本号の出来上るまでのあらましを記し、これによせられた各方面の方々の御協力を深謝する次第であります。

昭和四十年十二月